京都工芸繊維大学

氏　　名	タタラ ケイタ 多田羅　景太
学位(専攻分野)	博　士（学術）
学位記番号	博　2　1　3　号
学位授与の日付	令和 7 年 3 月 21 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科　デザイン学専攻
学位論文題目	デンマークモダン家具デザインの社会的受容の変化に関する研究
審査委員	(主査)教授　中野　仁人 教授　木谷　庸二 教授　平芳　幸浩 本学名誉教授　櫛　勝彦

論文内容の要旨

家具デザイナーと家具職人の協働によって、数多くの名作が生み出されたデンマークのモダン家具デザインは、1940 年代から 1960 年代にかけて世界的にも高い評価を受けた。その後、衰退期を迎えたが、1990 年代以降に再評価されるようになり、近年はオークションハウスなどでも希少なビンテージ品が取引され、美術館でもデンマークのモダン家具をテーマにした展覧会が開催されるようになった。本研究は、デンマークモダン家具デザインの萌芽期から現在に至る期間を視野に入れ、多層的に展開する社会的受容の変化の様相を明らかにするものである。

特定のデザインが長期にわたって人々に受け入れられる例は様々にあるが、その中でもデンマークのモダン家具デザインに注目する理由は３点ある。１点目は社会的認知度の向上である。デンマークのモダン家具デザインは、2000 年代に入るとフィンランドやスウェーデンを含む北欧デザインの流行と共に、日本でも広く認知されるようになった。近年は公的な美術館においても展覧会が開催されている。２点目は流通の多層性である。デンマークのモダン家具は、発表から半世紀以上が経過したいわゆるロングライフデザインが多く、現行品を製造するメーカーにとって、その製造ライセンスは大きな資産となっている。一方でこのような現行品に加えてビンテージ品が存在しており、希少価値の高いビンテージ品はオークションハウスや専門店において、高額で取引されている。つまり同一モデルであっても現行品とビンテージ品が市場に混在しており、異なる販路で流通している。３点目は模造品の存在である。近年日本では、リプロダクトやジェネリック製品と呼ばれる家具の模造品が流通しており、社会問題となっている。デンマークでは 20 世紀中頃にデザインされた家具のデザインを著作権で保護しているが、日本では家具のデザイン含むいわゆる量産品を著作権によって保護することは認められていない。著作権の代わりに意匠権を活用する方法はあるが、保護期間が最長 25 年であるため、ロングライフデザインにとってその効力は限定的である。そのため、EC サイトなどにおいてデンマークの家具の模造品を目にする機会が多い。

本研究では、このような特徴をもつデンマークのモダン家具デザインが、いかにして誕生し、社会に受容されてきたか、各時期における価値づけの変遷を追った。1940 年代から 1960 年代にかけてのデンマークモダン家具デザインの黄金期を取り扱った先行研究は多数存在するが、2000 年以降のデンマーク家具を取り巻く状況に着目した研究は進んでおらず、長期間にわたる評価の変遷を扱った研究は現段階で見当たらない。

第１章では、先行研究を踏まえて、デンマークモダン家具デザインの礎がコーア・クリントによって築かれた後、黄金期を迎えて世界的に評価されるようになり、後に衰退期を経て再評価され、現在では北欧デザインの中核を成す存在として、今なお市場に存在する経緯を確認した。

第２章では、1927 年から 1966 年にかけてコペンハーゲンで開催されたキャビネットメーカーズギルドによる展覧会に注目し、家具職人と家具デザイナーの展覧会への関わり方、および両者の協力関係を分析し、当時のデンマーク家具デザインをめぐる状況の考察を行った。

第３章では、デンマークの主要家具メーカー５社（フリッツ・ハンセン、カール・ハンセン＆サン、フレデリシアファニチャー、ワンコレクション、PP モブラー）における、近年の製品ラインナップ構成を定量的に分析し、復刻事業や新製品開発に対する方針を明らかにした。

第４章では、日本市場における家具の模造品流通に注目し、デザインを保護する法律や模造品に対する正規品メーカーの考え方、模造品と正規品の品質的な差異などの視点から、家具デザインの分野に模造品が集中する理由を考察した。

第５章では、近年オークションハウスや専門業者においてビンテージ品が高額で取引され、公的な美術館でも大規模な展覧会が開催されたフィン・ユールを例に、デンマークの家具が量産を前提としたプロダクトから、美術館で鑑賞される美術品へと変化していった過程を検証した。

これらの考察を通して見えてきたのは、再評価を経てロングライフデザインとしての地位を確立したことに伴う功罪である。これまで注目されてきた、いわゆる黄金期のデザインの光が強いからこそ、影とも言える事象が生じていることがわかる。本研究で取り上げた、過去の著名な家具デザインに依存した現行品メーカーの経営方針と模造品問題はその一例であると言えよう。ビンテージ品市場の過熱と美術館における展示といった事象も、デンマーク家具デザインを取り巻く状況を複雑化させている。本研究において、デザインの誕生から現在に至る長い期間における動向を捉えたことにより、市場的価値と文化的価値がそれぞれ高まり、複層的な価値づけが形成されながら社会に受容されている様相を明確に示すことができた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、申請者が永年にわたり研究を続けてきたデンマーク家具に関する詳細な分析と考察をもとに、20 世紀から今世紀にかけてのデンマーク家具デザインの動向と課題を浮き彫りにする画期的な研究である。本論文の特筆すべき特徴は以下の点である。

第一に、これまで論じられてきたデンマーク家具の既往研究に 2000 年以降の市場の動きに関す

る調査分析を加えることにより，デンマークの家具デザインに対する社会的受容がどのように変化してきたかを明らかにしている。このことは、デンマークを中心にしながらも20世紀後半以後の世界の家具デザインの状況を捉えることでもあり、モダンデザイン以降の今日のプロダクトデザインを検証するにあたり非常に有意義である。第二に、工芸的ものづくりと20世紀後半からの工業的生産の相剋について論じ、そこでの技術の意味について考察するもので、今日のものづくりを検討するにあたり非常に示唆に富んだ研究である。第三に、デンマーク主要メーカーの椅子等家具の多くの現物資料を具に調査し、オリジナルとジェネリックを比較する手法は、強い説得力がある。素材や加工法、接合部などのディテールに関する分析は、家具のデザイナーであり作り手でもある申請者ならではの独自の視点である。このように、本論文は多くの文献調査と現物調査の広範囲にわたる慎重かつ緻密な研究作業を踏まえ、独自の視点からの分析、考察を展開したもので、博士学位論文として十分評価に足るものである。

なお、本論文の一部は、いずれも以下の査読付の３論文としてすでに公表されている。

① 多田羅景太：「キャビネットメーカーズギルド展における家具デザイナーとキャビネットメーカーの協力関係について」デザイン理論、76号、55-69頁、2020
② 多田羅景太：「デンマーク主要家具メーカーにおける製品ラインナップの構成と復刻について」デザイン理論、84号、55-69頁、2024
③ 多田羅景太：「家具の模造品が日本市場に及ぼす影響 ―ジェネリック製品についての考察―」デザイン理論、57号、15-28頁、2011

また、申請者はデンマーク家具の研究者として広く認知されており、以下のような著書、講演、展覧会の企画運営、など多数の実績がある。

単著／多田羅景太：「流れがわかる！デンマーク家具のデザイン史」（誠文堂新光社）2019
翻訳／多田羅景太：「ボーエ・モーエンセン DESIGN FOR LIFE」（Copenhagen Film Company）2017
講演／多田羅景太：「流れがわかる！デンマーク家具のデザイン史」ＮＨＫ文化センターオンライン講座　2021
　　多田羅景太：「ポール・ケアホルムデンマークのモダン家具デザイン界における異色デザイナー」2024
展覧会／多田羅景太：「フィン・ユールとデンマークの椅子展会場デザイン」2022　　ほか